

市場革命の時代における女工たちの労働運動

——マサチューセッツ州ローウェルを中心に——

久田 由佳子

1. はじめに

19世紀前半のアメリカでは、運河や有料道路などの建設による交通網の発達、北部における水力紡績機や力織機の導入による綿工業の発展とそれに伴う南部の綿花栽培の拡大など、大きな経済的変化が生じた。こうした経済的変化とともに、政治・社会・文化的な変化をも包括する概念として、今日、アメリカ史家の間では「市場革命」が定着している¹⁾。この時代には、マサチューセッツ州ウォルサムやローウェルを中心に、当時としては先端技術の力織機を導入した綿工場が建設されたが、ここではそれまで余剰労働力と見なされた多くの農村出身の未婚女性が女工として働くようになり、当時「ローウェル熱」と呼ばれるような社会現象を生み出した²⁾。

ウォルサムやローウェルの会社設立者たちは、ヨーロッパの労働者とは対照的な、徳も教養もある農家の娘を労働者として採用していることを自負し、チャールズ・ディケンズやハリエット・マーティノー、ミシェル・シュバリエなど、国外からも多くの見学者を引きつけた。女工たちは、1840年代になると、会社の支援の下で自ら編集と記事の執筆もつとめる雑誌『ローウェル・オフアリング』を出版し、そのこともディケンズからの高い評価につながった³⁾。その一方で女工たちは、度重なる賃下げや最長で13時間を超える長時間労働に対して、ストライキや10時間労働立法を求める請願運動をおこしていた。本稿では、19世紀前半に綿工場で働いた女工たちの抗議行動を具体的に見ていくことによって、この時代に起こった変化の一側面を明らかにしたい。

2. ローウェルの工場建設に至る経緯と経営者たち

女工たちの動向を見ていく前に、まずローウェルの工場建設に至る過程

を整理しておきたい。経営者側の動向を明らかにすることによって、世間の評判とは裏腹に、なぜ彼女たちが抗議行動をおこしたのか、その手掛かりを得るためである。

1790年にイギリス移民のサミュエル・スレイターとモーゼズ・ブラウンらが、ロードアイランド州ボウタケットにアメリカ初の水力紡績工場を設立した時、アメリカでは織布工程はまだ機械化されていなかったが、1796年から1815年の間に少なくとも45人の発明家が力織機に関する特許を申請していた。この中でボストン商人フランシス・C. ローウェルと機械工ポール・ムーディは、1814年にマサチューセッツ州ウォルサムで力織機を完成させた。ローウェルは、中国、インド、西インドなどの貿易を通じて富を蓄積した大商人であった。多くのボストン商人が、国内製造業は貿易を停滞させる可能性があるとして反対の立場をとっていた中で、彼は、ヨーロッパ旅行中の1811年ごろから綿工場の設立計画を温めていたとされている⁴⁾。

1813年、ローウェルは、10人ほどの仕事仲間とともに、ウォルサムにボストン製造会社を設立し、1813年のマサチューセッツ州法によって正式に法人が認められた⁵⁾。当時のおもな出資者と出資額は、ローウェル1500ドル、パトリック・ジャクソン2000ドル、ジョン・ゴア1000ドル、チャールズ・ゲイルソン1000ドル、イズラエル・ソーンダイク2世1000ドル、サミュエル・ソーンダイク1000ドル、ネイサン・アップルトン500ドルであった⁶⁾。このうち親戚筋のジャクソンは、自らの事業の失敗もあって工場経営に専念することになったが、ローウェルも含めた商人たちは自身の事業を継続した。1813年9月の合意書では、ボストン製造会社では紡績と織布をおこなうことが明記されたが、この試みはアメリカで最初のものであった。ウォルサムでは、高級織物ファンシーグッズの製造が不可能であり、安価な織りの粗い綿布の製造に限定されていた。他方、ボストンの商人は、織りの粗いインド綿布の輸入で相当な利益を上げており、しかもその品質にはばらつきがあった。それまでのアメリカ国内のインド綿布市場に食い込むことで、ウォルサムは成功をおさめることになったのである⁷⁾。

1814年秋、力織機第1号の試運転が開始された。当初、ウォルサムの工場に設置されたほとんどの機械は、近隣の工場から購入されたものであり、たとえばルーサー・メトカフ社製の梳綿機10台、スロックスル紡績機5台、ミュール紡績機2台、といった具合であったが、力織機を完成させ

たムーディは、その後、その他の機械の改良に乗り出した。1817年、ボストン製造会社は、初めて自社製の機械を他社に販売したが、その後3年間の機械の売上げは、年平均1万2000ドルにも及んだ⁸⁾。

1812年戦争終結後にイギリスの安価な綿製品の輸入が再開されると、合衆国内の多くの紡績工場は閉鎖に追い込まれたが、それまで手織機に依存していた製造業者は、力織機の導入に踏み切ることによってイギリスとの競争を乗り切ろうとした。当時、ウォルサムの力織機が125ドルで売られたのに対して、後発のウィリアム・ギルモアによる力織機は70ドルだったため、ギルモアの力織機はニューイングランド南部に普及した。力織機の導入によって、生産コストは1ヤード当たり4セントから9セント安くなったため、紡績に特化していた多くの業者が織布部門にも進出した⁹⁾。

ウォルサムの工場では、その後、建物が増設され拡張が進んだが、動力源となるチャールズ川の水力には限界があった。ウォルサムの工場は、染色されていない無地の織物を専門に扱っていたが、ジャクソンやアップルトンらは、捺染キャラコの製造開始計画を立て、より水源の豊富な工場建設候補地を探し始めた。最終的に選ばれたのは、当時「イースト・チェルムズフォード」と呼ばれた村で、1817年に志半ばで死亡したローウェルを記念して、のちにその名が付けられた¹⁰⁾。ウォルサムの会社経営で多忙のジャクソンに代わって、ローウェルの新会社経営に携わるようになったのは、ボストン商人のカーク・ブートであった。1821年12月、ジャクソン、アップルトン、ブートらは会合を開き、合意書を取り交わした。すなわち、州議会に「メリマック製造会社」の名で法人を認めるよう請願書を送ること、総株式は600に分けること、ブートを経理担当兼総責任者に指名し、その報酬として年3000ドルを支払うこと、工場立地に適した土地と水利権を所有するメリマック川運河・水門会社の株、および運河に隣接する土地を同社から購入すること、などであった。各自の持ち株数は、カーク・ブート90、ジョン・W.ブート90、ネイサン・アップルトン180、パトリック・ジャクソン180、ポール・ムーディ60と定められた。メリマック製造会社が州法で正式に法人が認められたのは、1822年2月であった。また、新工場建設にあたっては、既存の運河を拡張し、水門を改築する必要となったため、同年春に工事が開始された。これは、当初の予算と工事予定期間を上回り、12万ドル以上におよぶ難工事となった¹¹⁾。

メリマック製造会社は、1823年9月から操業を開始した。工場の設立

以前には数軒の民家があるのみだったイースト・チェルムズフォードの村には、工場の建物をはじめ、女工たちのための寄宿舍、教会、図書館が建設された。1825年、ハミルトン製造会社が設立され、1828年にはアップルトン製造会社とローウェル製造会社が設立された。工場町として発展するにつれて、「イースト・チェルムズフォード」は、チェルムズフォードから独立すべく、州議会に請願書を出していたが、1826年に正式にタウンとなり、「ローウェル」と名を変えた。さらに1830年には、ボストン商人のエイモスとアボット・ローレンスがこの事業に参入し、サフォーク、トレモント、ローレンスの3つの製造会社が設立された。この頃になると、綿工業の将来性を期待して、それまで綿工業とは関わりを持たなかった者が確実な投資先として選ぶようになっていた。1835年にブート製造会社が加わり、1836年に市となったローウェルの人口は、国勢調査によれば1830年に6,474人となり、さらに1839年にマサチューセッツ製造会社が加わって、1840年の人口は20,796人へと増加した。ローウェルの綿製品の市場は、1830年代から40年代にかけて広がりを見せ、国内の西部や南部はもとより、西インド諸島、メキシコを含むラテンアメリカ、トルコ、アフリカ、インド、ロシア、中国にまで輸出された。特に中国への輸出は、1842年の南京条約に伴う5港開港以降、年間100万ドル以上の利益を生んだとされている¹²⁾。

ローウェルの実験が成功を収める一方、会社設立者F.C. ローウェルらの第二世代は、同業者からの牽制ゆえか、会社の中で父親たちのような地位に就くことはなかった。1837年、メリマック会社の経営者の1人カーク・ブートが死亡すると、その後任としてローウェルの次男フランシス・C. ローウェル2世が就任したが、投資家やその他の利害関係者たちの間で、彼の会社内での権限を限定しようとするなどの動きもみられ、程なく彼は辞職した。その他の初期の経営者の息子たちも同様の経緯をたどった¹³⁾。

かつてウォルサム、ローウェルの独壇場であった綿布の高度な大量生産技術は、その後、特許の期限切れや機械工のネットワークに裏打ちされた技術革新によって、多くの製造業者が享受することとなった。当初、決して儲かるとは考えられなかった綿工業は将来性が見込まれるようになり、1830年代から1840年代にかけてニューイングランド全域で新たな工場建設が進んだ。その結果、新旧の業者が同種の製品で競合することになり、結果として綿製品の価格を下げることとなった。また新規参入組の多くは、

自らは会社経営から距離を置き、直接経営にあたる者を雇ったが、こうした人々にとって繊維産業は、単なる収入の手段であった。後に論じるような綿工場における労働条件の悪化は、こうした業者間の競争によるところが大きかった。またウォルサム、ローウェルの場合、初期の投資家・経営者の世代交代と新規に投資に加わった商人たちの増加にともなって、次第に会社設立当初の理想が失われたことも影響したといえる¹⁴⁾。

3. 工場労働者たち

ウォルサムやローウェルでは、操業開始当初、ヨーロッパのような劣悪な状態を避けるために、また工場労働と貧困が結びつけて捉えられないように、労働力をニューイングランドの農家出身で「教育と美德を身につけた」未婚の女性たちに求めた。会社は、彼女たちを引きつけるために寄宿舎を建設し、「尊敬されうる」寡婦たちに管理を任せ¹⁵⁾。

ウォルサムやローウェルの工場では、性別によって職種が分けられた。原料の綿花が織物となるまでの作業は同一工場の中でおこなわれていたが、その工程は、大まかには綿花の開綿・打綿、梳綿、紡績、織布に分かれていた。各作業工程の「監督」と呼ばれる職長などの管理職、開綿・打綿工程の労働者、機械製作・修繕部門の機械工などは男性の仕事であり、女性は、梳綿以降の工程で機械のトラブルを監視する機械操作工として働いた。この職種の区分は、賃金にも大きく影響していた。男性の賃金は日給制であったのに対し、女性の賃金は監視する機械の生産量に応じた出来高払いであった¹⁶⁾。

ウォルサムのボストン製造会社では毎月1度賃金が支払われていたが、比較的熟練が必要とされたとされる織布工程の場合、1828年9月における男性の職長の日給は2ドル、月給にして48ドルであったのに対し、女性のある織機操作工では、勤務日数や出来高賃金から割り出した日給がおおよそ55セント、1カ月あたり13ドル32セントであった¹⁷⁾。女工の中には、こうした出来高払い以外の賃金体系で働く者もいた。「スペアハンド」と呼ばれる見習い女工である。彼女たちは、先輩女工と2人1組で働きながら、仕事の内容を覚えていったが、彼らの賃金は日給制で、出来高とは関係なく支払われた。たとえば1837年7月の賃金台帳によれば、第1梳綿室には4人のスペアハンドがおり、1日あたり約30～40セントが支払わ

れていた¹⁸⁾。T. ダブリンの研究によれば、ローウェルのハミルトン製造会社の場合、正規の配置につくことができるまでには平均57日要していたとされる。1836年4月から7月までの間に、スペアハンドとして働きはじめた34人のうち、働きはじめてから1カ月以内に正規の配置についた者はわずか3名で、3カ月経過しても依然として3分の1がまだスペアハンドにとどまっていた。ダブリンは、こうした見習いシステムが女工たちの連帯感を育てる揺籃となっていたことを指摘している¹⁹⁾。

当時の労働者、特に男性の職人たちの仕事場では、労働史家 H. ガットマンが描いたように、昼休み中の飲酒、昔の仕事仲間や行商人の持ち込んだおやつや時間などによって、労働時間と非労働時間の区別があいまいとなるのは日常茶飯事であった²⁰⁾。しかしウォルサムやローウェルの労働者たちは、物理的には、こうした前近代的な不規則な労働のリズムから引き離されていた。工場は塀に囲まれており、工場操業中に工場に入るには会計室を通らねばならず、そこでは工場に出入りする者がチェックされ、関係者以外の立ち入りが制限されていたからである。また工場と寄宿舎の規則も労働者管理の一翼をになった²¹⁾。

工場経営者たちは女性労働者を積極的に雇ったが、それは、男性よりも低賃金で雇えるという理由に加えて、家の中で妻や娘が家長に従うように、女工が職長に対して従順であるを見ていたからである。職長と労働者の性別分業の導入は、工場内に家長長制をもたらし、実際、職長は女工にとって父親代わりの存在となった。女工たちは、自分たちが工場経営者たちと敵対するものとして認識していたわけではなく、彼女たちの期待と現実が一致しているかぎり、抗議行動にでることはなかった²²⁾。しかし、早くも1820年代から彼女たちは抗議行動を起こしはじめた。1970年代にガットマンは、過去の歴史家が、1840年以前の女工のストライキの記録をほとんど見つけていないことを指摘したが²³⁾、D. ゾンダーマンによれば、最も初期のストライキは1821年におこったウォルサムのストライキであった。最初に未婚男性を対象に予告なしに賃下げがなされ、続いて女性全員がその対象となったため、ストライキがはじまったとされている²⁴⁾。

4. 1830年代のストライキ

ローウェルで初めてストライキがおこったのは、1834年2月のことと

されている。当時、「ターン・アウト」と呼ばれたストライキは、繊維製品の価格の下落、市場の不振、在庫の増加に直面した諸会社が、3月1日から施行する15%の女工の賃下げを発表したことからはじまった。実のところ経営者会議では、当初25%の賃下げが提案されたが、現場の事情をよく知る工場長らが、職場の混乱や労働者の質の低下を招くとして難色を示し、結果として15%になったという経緯があったとされている²⁵⁾。

同年2月17日付『ボストン・デイリー・イヴニング・トランスクリプト』(以下『トランスクリプト』)紙によれば、女工たちは、自分たちが賃下げの対象になったと知って、数回にわたる集会を開き、ストライキ資金を確保するために銀行から預金を引き出していた。2月14日に指導者の女性が解雇されたのをきっかけに、職長の制止を振り切って、職場放棄をした。女工たちは、町じゅうを練り歩き、やがて指導者の1人が、「女性の権利や『金権貴族』の悪行について、メアリ・ウルストンクラフトを彷彿とさせる激しい演説」をおこなった。『トランスクリプト』紙は、こうした事件を伝えつつも、地元の日刊紙『ローウェル・ジャーナル』[ホイッグ党系]がこの事件を報道していないことなどを根拠に、一部の地元メディアが現実よりも誇張して報道しているにすぎないと結論づけた²⁶⁾。しかし、翌18日の記事では前言を撤回し、ローウェルの工場で働く「レディたち」が出した「団結は力なり」と題する声明文を転載した。

私たちの現在の目標は、団結して力を行使することです。私たちに、明白なる権利があります。私たちの愛国者たる祖先は、隷属よりも困難を選び、[中略]さらには命を捨ててまで、自分の子どもたちのために独立を獲得しました。[中略]強欲という名の抑圧支配が、私たちを奴隷にしようとしています。[中略]私たちは自由であり、神から与えられたあらゆるものを維持していきます。そして自由民の娘であり続けるのです²⁷⁾。

他方、週刊の『ローウェル・ジャーナル』紙は、同じ発行人による日刊紙が保ってきた沈黙を破って、2月19日付の同紙にストライキに関する記事を掲載し、このストライキに800人から1000人の女工が参加したことを認めつつ、工場とは直接関係のない危険人物によって扇動された可能性があるとして女工たちの積極的関与を否定した。ストライキは2日間続い

たが、結局のところ賃下げを撤回することはできなかった。同紙は、数人の首謀者が工場への立ち入りを拒否された他は、大半が賃下げを承知の上で工場に戻ったと報じたが、結局のところ、ニューイングランドにおいては、賃下げされても工場の賃金のほうが他のどの職業よりも高いというのが、同紙の主張であった²⁸⁾。

1836年10月1日、ローウェルの女工たちは再びストライキに入ったが、10月4日付の『トランスクリプト』紙によれば、これは寄宿代の値上げによる実質賃金カットに反対するものであった。10月3日には約2000人の女工が集まり、数百人の男性や少年とともに大集会を開いたが、その雰囲気はまるで祝日であるかのように明るかったと同紙は報じた²⁹⁾。同年1月現在の統計資料によれば、ローウェルにある8つの会社で働く女工は計5416人であり、3分の1以上の女工がストライキに参加したことになる³⁰⁾。このストライキには、当時11歳のハリエット・ハンソン〔後のロビンソン〕も参加していた。後に婦人参政権論者として活躍し、回想録を執筆した彼女によれば、ストライキのもう1つの原因は、会社が、女工1人あたりにつき支払っていた週25セントの寄宿代の補助を廃止したためであり、これと賃下げが組み合わされて、少なくとも週1ドルの収入減となるためであった。また、仕事をやめて行進した女工たちは、「私は尼になりません」の替え歌「私は奴隷になりません」を歌っていたという。

ああ、なんてかわいそうだとは思いませんか。私のように
かわいい娘が工場に送られ、やつれ果てて死ぬなんて
ああ、私は奴隷になんかなれません
奴隷になんかなりません
なぜなら自由を好むから
奴隷になんかなれません³¹⁾

このストライキの期間中、女工たちはおよそ2500人の会員からなる「女工協会」を組織し、収入がなく寄宿代を払えない女工を援助するための募金活動をおこなった。このストライキの組織率は1834年の時よりも高く、また当時は労働者不足がささやかれた時期でもあったため、会社が受けた影響は大きく、寄宿代の値上げを見合わせる会社もあったとされている³²⁾。ストライキに参加した女工の多くは、再び工場に戻ったといわれて

いる一方、ハリエット・ロビンソンの回想録によれば、寡婦で寄宿舎の管理人だった彼女の母は、このストライキの後に解雇された。その理由は、母親が年長の娘たちのストライキ参加を阻止できなかったのはともかく、まだほんの子どもであるハリエットすら管理できなかったことを問題としたためとされる。ただし彼女の回想には、母親の失業後の生活については何の記述もなく、一家がローウェルから動いた形跡もないため、これは一時的な処分であった可能性もある³³⁾。他方、ローウェルのハミルトン会社の従業員登録簿を見ると、ローレンス製造会社でのストライキに参加していたことが明るみとなって解雇された者が複数おり、ブラックリストが機能していたことが窺える³⁴⁾。

1830年代のローウェルの2つのストライキでは、いずれも野外集会や資金調達などの計画的な戦略が用いられたが、彼女たちには、男性の熟練職人たちのような伝統がなく、生涯をとおして労働者にとどまるつもりもなかった。にもかかわらず組織化が可能となった要因として、ダブリンは次の2点を挙げている。1つは、工場に入る前からの親類・友人関係を基盤とし、職場や寄宿舎でさらに強化された女工たちの連帯感、もう1つは、「自由民の娘たち」という言葉で表されるように革命期の共和主義の伝統を自分たちがひきついでいるという意識である³⁵⁾。これは、男性の熟練職人の共和主義とも対比することができる³⁶⁾。

これらのストライキで注目されるもう1つの点は、自分たちと南部の奴隷の境遇を対比させた、「私は奴隷にはならない」というレトリックである。「賃金奴隷制」や「白人奴隷」といった比喩は、アメリカにおいて1830年代頃から労働運動の中で用いられるようになったが、D. ローディガーは、これらの語が北部労働者の環境改善とともに奴隷制廃止を唱えるレトリックにもなりうる一方で、奴隷制支持、あるいは白人優位主義のレトリックとしても機能していたことを指摘している。こうした中で、ローウェルの女工たちが奴隷制に対してどのような立場をとったのかについては、今後の研究が必要である。ローディガーは、「賃金奴隷制」と南部奴隷制の両方の廃止を求めた例外的存在として、1840年代に活躍したS. バグリーの名をあげており、彼以外の研究においても奴隷制廃止運動に関わった女工は少なくないとの見解はある。しかし、その根拠とされる奴隷制即時廃止論者W・L. ギャリソンが発行していた『解放者』リベレーター紙の記事は、ローウェルで開かれた反奴隷制の集会に参加した多数の女性が女工であったことを

確証するものとはいえなかった³⁷⁾。また、後で詳しく論じるように、1840年代に労働条件が悪化する中で、女工たちが奴隷制廃止運動に賛同できるのか否か『ローウェル・オフアリング』誌の編集者 H. ファーリーが疑念を呈していたことを示す史料も存在している³⁸⁾。

5. 10時間労働運動

1830年代のストライキは、ある程度の計画性が見られるものの、突発的であったにすぎなかったが、1840年代になると初期のストライキの失敗から、立法要求という形の、より計画的に組織された請願運動が起こることになる。1837年恐慌以降、ローウェルの工場では賃金削減や数百人単位での解雇など、経営縮小がおこなわれていたが、当初、抗議運動は起こらなかった。しかし1843年から48年頃にかけて、労働運動は新たな段階を迎えることになる³⁹⁾。

ローウェルの工場では、1842年頃から数年間かけて、女工たちが担当する機械の数や速度を増減させつつ、労働者1人・機械1台あたりの生産量を増やし、同時に出来高賃金のレートを下げて、女工の賃金を抑制した。たとえば、1842年に毎分140打の速度で2台の織機を担当していたある女工は、その2年後に、毎分100打で4台の織機を担当させられ、1844年6月には4台の織機を毎分120打で動かさせられた。1840年から1854年にかけて、紡績工1人当たりの平均スピンドル数は129から294に、織機は1人当たり、平均1.3から2.9台と、2倍以上に増加したのである。しかしその一方で賃金は基本的に据え置かれた。また職長による女工の管理を徹底させるために、報奨金制度が導入された。この制度は、最も生産性をあげた労働者をもつ職長に報奨金を与えるものであり、彼らは互いにそれを競いあった。彼らの年間所得は600ドル程度であったのに対して、報奨金は100ドル近くになることもあった。こうした労働条件の悪化に対応するために女工たちがとった手段は、直接行動ではなく、マサチューセッツ州議会に対して10時間労働立法を要求する請願運動だった⁴⁰⁾。

ローウェルの系列会社は、マサチューセッツ州法でその設立が規定されており、彼女たちにしてみれば、州に対して法的規制を求めることは理にならなっていた。1845年に『ローウェル今昔』を出版した H. マイルズ牧師によれば、当時の1日平均労働時間は、4月が最長で13時間31分、12月

と1月が最短で11時間24分であったが、同年発行の労働機関紙『ヴォイス・オブ・インダストリー』（以下『ヴォイス』）に掲載された記事は、14時間労働のケースも示唆していた。10時間労働は、従来から男性の熟練職人が要求しており、一部地域の一部の熟練職種ではすでに実現していた。また連邦職員に対してはヴァン・ビューレン政権下の1840年に実現していた⁴¹⁾。

こうしたなかで女工たちは、マサチューセッツ州議会に対して10時間労働法を要求する請願書を提出するようになった。請願書は1842年から45年まで毎年議会に提出されたが、提出された4つの請願書のうち2つはフォールリヴァー、2つがローウェルからであった。さらに全請願書の署名数2139のうち、1151という過半数がローウェルから提出され、その大半は女性の名前であった。1845年1月、ローウェル婦人労働改革協会（Lowell Female Labor Reform Association 以下LFLRA）が女工サラ・G. バグリーの指導のもとで設立された。これに先立つ1844年秋、ニューイングランドの諸都市の熟練工や改革者たちによって、ニューイングランド労働者協会（New England Workingmen's Association 以下NEWA）が設立されたが、その幹部の中にはLFLRAで指導的役割を果たすことになる3人の女工が含まれ、うち1人がバグリーであった。LFLRAは当初12名の会員から始まったが、6カ月で約500名に増加した。1846年1月には規約が定められ、この協会は10時間労働の実現と工場内の衛生状態、及び照明設備の改善を目的とすることが確認された⁴²⁾。

請願書に対応して、マサチューセッツ州議会下院は特別委員会を設置して調査を開始し、1845年2月には公聴会を開催した。証言をおこなったのは、5人の男性と6人の女工であった。男性のうち2人はローウェル選出の下院議員で、ローウェルの工場で機械工や職長の経験があり、他方6人の女工のうち、1人はローウェルでの勤務歴が8年半になるバグリーで、そのほかに勤務歴が長い者が通算で8年半、次いで4年、3年、2年9カ月、最も短い者は16カ月であった。女工たちは、経験の浅い1人を除き、いずれも労働時間の長さや食事休憩時間の短さを訴え、1人は早朝や夕方照明ランプによる空気の悪さを指摘した⁴³⁾。

その後、委員会は現地調査に入ったが、ローウェルの死亡率が高くないことや、法律は州内のすべての個人や団体に適応されるものでなければならないことを理由に、現時点での労働立法は不要との結論に達した。10

時間労働立法自体は実現しなかったものの、こうした労働者による請願運動は経営側を動かし、1847年に昼食時間の延長による労働時間の短縮へと向かわせることとなった。また同年にはニューハンプシャー州で、州法による10時間労働が実現した⁴⁴⁾。

ローウェルの調査をおこなった、マサチューセッツ州議会下院特別委員会の長をつとめたのは、ホイッグ党系新聞『ローウェル・クーリア』の編集者で州下院議員のウィリアム・スクーラーだったが、LFLRAは、『ヴォイス』紙を使って、彼の州下院議員再選阻止を訴えた⁴⁵⁾。スクーラーの落選が明らかになると、1845年11月14日付の『ヴォイス』は、この選挙結果を評価するコメントを発表した。

この町 [ローウェル] から選出される下院議員の選挙候補者9名のうち、次の5名が当選した [中略；いずれの当選者もホイッグ党選出]。我々の隣人で、この町の御用新聞の編集者でもあるスクーラー氏は、ローウェルの有権者から非常に丁寧な招待状を受け取り、この冬は在宅していただくことになり、少なくともこの町の有権者の費用でポストンにお出かけになることはなくなった。我々は、政党政治家ではなく、昨今の政治についてあまり共感を抱いてはいないが、しかし、ローウェルの働く男女の利益に反する行為をおこなったこの人物の敗北にはある程度満足している⁴⁶⁾。

また民主党系の地元新聞『ローウェル・アドヴァタイザー』紙は、スクーラーに対して事前に落選の可能性があることを警告していたことを明らかにした。女性に参政権がなくとも、彼女たちに同調した男性労働者は、彼に投票しない可能性が高いからであった⁴⁷⁾。

LFLRAがスクーラーの落選を求めて有権者に訴えた『ヴォイス』紙は、1845年5月にマサチューセッツ州フィッチパークで創刊された週刊紙で、バグリーは当初から同紙に記事を執筆していたが、資金難に陥った1846年以降、LFLRAが印刷機を購入し、バグリーを編集長として、ローウェルで発行されるようになった。他方、落選運動の対象となったスクーラーは、実のところ、ディケンズらも賞賛した『ローウェル・オフアリング』(以下『オフアリング』)の発行人でもあった。『オフアリング』の発行は1840年10月に始まったが、この雑誌は、女工たちが当時の流行していた

雑誌記事を真似て、エッセイや短編小説などを創作する「自己向上サークル」と呼ばれるクラブ活動から生まれたものであった。当初は、地元のユニヴァーサリスト教会の牧師がその発行人となっていたが、最終的には1842年秋に『ローウェル・クーリア』（以下『クーリア』）のスクーラーが、同種の女工の雑誌とともに買い取り、『ローウェル・オフアリング』の名で発行を開始し、その後まもなく女工のハリエット・ファーリーが編集を担当することになった⁴⁸⁾。ニューハンプシャー州で牧師の娘として生まれたファーリーは、1837年からローウェルの工場で働き始めたが、1840年12月に『ボストン・クォーターリー・レビュー』に掲載された工場労働の劣悪さを批判した記事に対して、『オフアリング』に会社を弁護する記事を投稿し、経営者たちから注目されるようになったとされる⁴⁹⁾。実際のところ、彼女が守ろうとしたのは、会社というよりも、自らを含めた女工の尊厳であり、女工たちが工場労働によって道徳的に墮落していないと主張したにすぎなかった⁵⁰⁾。その彼女をスクーラーが『オフアリング』の編集者に抜擢し、彼女は工場を辞めて専任の編集者となったのである。

後に『ヴォイス』の編集者となったバグリーも、当初はスクーラー傘下の『オフアリング』に投稿していたが、1845年の公聴会の後、『オフアリング』批判を展開するようになった。ファーリーとバグリーの対立について、ダブリンは、P. フェーラーと A. ドーリーによるマサチューセッツ州リンの製靴工に関する研究を援用し、女工たちを忠誠主義者と反逆者の2類型にわけて分析を試みた。忠誠主義者と反逆者は、どちらも勤勉道徳をうけいれ、前工業的な価値観、態度を拒否した者たちではあったが、その違いは、その階級観の違いにあった。忠誠主義者が、労働者と雇用者の利害は一致するものと考えたのに対し、反逆者は、労働者と雇用者の利害が対立すると考え、自ら慣れ親しんだ生活水準と独立を維持する唯一の手段として労働運動に参加した。この2つの範疇のうち、前者に含まれるのがファーリーら『オフアリング』の関係者であり、後者にあたるのがバグリーら『ヴォイス』を中心に活動した女工たちであるとダブリンは分類した⁵¹⁾。しかしこうした類型論に対しては、すでにアメリカの研究者の間でも批判が出ており、別の分析視角が必要である⁵²⁾。

『オフアリング』と『ヴォイス』の編集者はいずれも、女工が労働者を非人間化しようとする機械の抑圧的な力から自分たちを守り、労働で手を汚すことのないレディたちと自分たちが教養にかけては対等であることを

証明しようとしていた点では一致していた⁵³⁾。実のところ、ファーリーとバグリーの対立の周辺に目を向けると、この問題は、単に労働問題にとどまらず、奴隷制廃止問題にも関わり、ひいては「男性の領域」とされる政治情勢とも関わっていたことが窺える。バグリーらは『ヴォイス』紙上で『オフリング』批判を展開したが、同時に『ローウェル・アドヴァタイザー』紙上で両者は論争を繰り広げた。民主党系の同紙に掲載された『オフリング』批判に対して、ファーリーが反論の投稿をおこない、それに対してさらにバグリーが反論に加わるという形で論争が始まったのである⁵⁴⁾。

また、バグリーとスクーラーの対立が顕在化していなかった1843年3月、奴隷制廃止論者のマリア・ウェストン・チャップマンにあてた手紙の中で、ファーリーは、昨今の労働条件悪化の中では、ローウェルで開催される反奴隷制フェアに女工たちが参加するかどうかは期待できないといったことを書いていた。非常に断片的なこの手紙1通から多くを読み取ることとは不可能であるが、少なくともファーリーが、このギャリソン派の運動に賛同し、スクーラーも自身の『クーリア』紙に行事の広告を掲載することによって彼らの活動に協力する姿勢を見せていること、ファーリーが女工たち一般の奴隷制廃止問題に対する関心度を疑問視していたことは明らかである⁵⁵⁾。では、実際に、女工たちはこの行事に参加したのか否か。『解放者』の記事は、この行事が成功裏に終わったことを示しているが、女工たちがどの程度参加したかまでは不明である⁵⁶⁾。ファーリーの取り越し苦労か、中産階級を中心とする活動内容が女工たちの日常生活にそぐわないものであったため参加しなかったのか、あるいはファーリーが指摘したように実際に奴隷制廃止問題に関心を持たなかったのか。1845年創刊の『ヴォイス』紙には、しばしば[人種奴隷制も賃金奴隷制も]「いかなる形の奴隷制も」廃止すべきとする記事が散見される一方、ギャリソンの『解放者』やスクーラーの『クーリア』に対する批判の投稿なども見受けられる⁵⁷⁾。

一般に、市場革命の中で男性と女性、公私の「領域」が明確に分かれたと考えられる傾向にあり、女性には参政権がないことから、これまで女工たちの対立は、女工個人の問題として扱われる傾向にあった。しかし、彼らが、この時代に安価で入手可能になった定期刊行物、とりわけ党派別新聞を通して論争を展開したことや、『ヴォイス』紙に奴隷制廃止運動に関

わる記事が掲載されていることを鑑みると、この問題は、労働問題の中だけでなく、奴隷制廃止運動との関係や連邦及び州レベルの政治的文脈の中に位置づけて議論する必要がある。

6. おわりに

1847年1月、LFLRAは、相互扶助による健康保険制度を導入し、名称をローウェル婦人改革・相互扶助協会 (Lowell Female Reform and Mutual Aid Society) と変更したが、その後まもなく消滅したと考えられている。他方、LFLRAと協力関係にあったNEWAも、1846年9月にニューイングランド労働改革連盟 (Labor Reform League of New England) と名称を変更していたが、1849年に消滅した⁵⁸⁾。

労働条件が厳しさを増す中で、農村出身の女工の多くは工場を去り、ローウェルの工場はアイルランド系をはじめとする移民労働者が中心となった。19世紀半ばに進行した「教職の女性化」の恩恵を受けた農村の若い女性たちは、もはや女工ではなく、教師となる道を選ぶ傾向にあった⁵⁹⁾。ローウェルの女工は、「市場革命」という大きな変化の中で生まれ、消えていった存在である。しかしこの時代の中で彼女たちが起こした行動は、当時の人口の大半を占めていた農民や、この時代に出現した労働者階級と中産階級の経験とも重なっていたのである。

注

- 1) Melvyn Stokes, et al., eds., *The Market Revolution in America: Social, Political, and Religious Expressions, 1800–1880* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1996).
- 2) Harriet H. Robinson, *Loom and Spindle or Life Among the Early Mill Girls* ([1898]; Kailua, Hawaii: Press Pacifica, 1976), 40–41; H. E. Beck to Harriet Jane Hanson, Sept. 7, 1846, Harriet J. Hanson Robinson Papers, Schlesinger Library, Harvard University, Cambridge, Mass.
- 3) Charles Dickens, *American Notes* ([1842]; Greenwich, Conn.: Fawcett Publications, 1961), 85; ディケンズ、伊藤弘之他訳『アメリカ紀行(上)』(岩波文庫、2005年)、148–56頁; Harriet Martineau, *Society in America, Vol. II* ([1837]; New York: Arno Press, 1966), 247–49; Michel Chevalier, *Society, Manners,*

- and Politics in the United States: Letters on North America* ([1839]; Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1967), 129–137.
- 4) David R. Meyer, *Networked Machinists: High-Technology Industries in Antebellum America* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2006), 51–52, 65–72; Nathan Appleton, *Introduction of the Power Loom, and Origin of Lowell* (Lowell, Mass.: B. H. Penhallow, 1858), 7–9; Samuel Batchelder, *Introduction and Early Progress of the Cotton Manufacture in the United States* (Boston: Little, Brown and Company, 1863), 63–73; Francis C. Lowell (1775–1817) Papers, Massachusetts Historical Society, Boston, Mass.; *The Dictionary of American Biography, Vol. IV* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1964), 552–53; Hannah Josephson, *The Golden Threads: New England’s Mill Girls and Magnates* (New York: Duell, Sloan and Pearce, 1949), 15–17; Robert F. Dalzell, Jr., *Enterprising Elite: The Boston Associates and the World They Made* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1987), 41; 渡辺喜七「ボストン工業会社の設立と企業家動機」『京都産業大学経済経営論集』5-1 (1971)、72頁。
 - 5) Commonwealth of Massachusetts, “An Act to Incorporate Francis C. Lowell, and Others, by the Name of the Massachusetts Manufacturing Company” [Boston, 1813] (Microfiche), Massachusetts Historical Society, Boston, Mass.
 - 6) Article of Agreement, Feb. 25, 1813, Boston Manufacturing Company Records, 1813–1930, Baker Library, Harvard Business School, Cambridge, Mass.
 - 7) Dalzell, *Enterprising Elite*, 26–31.
 - 8) Meyer, *Networked Machinists*, 59, 65–66.
 - 9) Barbara M. Tucker, *Samuel Slater and the Origins of the American Textile Industry, 1790–1860* (Ithaca: Cornell University Press, 1984), 90–92.
 - 10) *Correspondence Between Nathan Appleton and John A. Lowell in Relation to the Early History of the City of Lowell* (Boston: Eastburn’s Press, 1848).
 - 11) Appleton, *Introduction of the Power Loom*, 18–24.
 - 12) *Ibid.*, 19, 24–34; Dalzell, *Enterprising Elite*, 49–51; *Fifth Census, or Enumeration of the Inhabitants of the United States* (Washington, D.C., 1830), 16–17; *Sixth Census of Enumeration on the Inhabitants of the United States* (Washington, D.C., 1840), 44–45.
 - 13) Tucker, *Samuel Slater*, 121; Appleton, *Introduction of the Power Loom*, 33–34; Appleton Family Papers, Guide to the Collection, Massachusetts Historical Society.
 - 14) Tucker, *Samuel Slater*, 119–20.
 - 15) Appleton, *Introduction of the Power Loom*, 15–16.
 - 16) Thomas Dublin, *Women at Work: The Transformation of Work and Community in Lowell, Massachusetts, 1826–1860* (New York: Columbia University Press, 1979),

- 62-67.
- 17) Boston Manufacturing Company Records, Payrolls, September 27, 1828-August 29, 1829, Baker Library, Harvard University, Cambridge, Mass.
 - 18) Boston Manufacturing Company Records, Payroll, July 29, 1837-May 26, 1838.
 - 19) Dublin, *Women at Work*, 71-72.
 - 20) Harbert G. Gutman, *Work, Culture, and Society in Industrializing America: Essays in American Working-Class and Social History* (New York: Alfred A. Knopf, 1976), 32-36; ハーバート・G. ガットマン著、大下尚一他訳『金ぴか時代のアメリカ』(平凡社、1986年)、50-55頁。
 - 21) Henry A. Miles, *Lowell, As It Was, and As It Is* (Lowell: Powers and Bagley and N. L. Dayton, 1845), 64; Chevalier, *Society, Manners, and Politics in the United States*, 140.
 - 22) David A. Zonderman, *Aspirations and Anxieties: New England Workers and the Mechanized Factory System, 1815-1850* (New York: Oxford University Press, 1992), 102-103.
 - 23) Gutman, *Work, Culture, and Society*, 26-27; 『金ぴか時代のアメリカ』、43頁。
 - 24) Zonderman, *Aspirations and Anxieties*, 198.
 - 25) Dublin, *Women at Work*, 90.
 - 26) *Boston Daily Evening Transcript* (以下*Transcript*), Feb. 17, 1834; Dublin, *Women at Work*, 89-91.
 - 27) *Transcript*, Feb. 18, 1834.
 - 28) *Lowell Journal*, Feb. 19, 1834.
 - 29) *Transcript*, Oct. 4, 1836.
 - 30) Statistics of Lowell Manufactures, January 1, 1836, Baker Library, Harvard Business School.
 - 31) Robinson, *Loom and Spindle*, 51.
 - 32) Dublin, *Women at Work*, 99-101.
 - 33) Robinson, *Loom and Spindle*, 52.
 - 34) Hamilton Manufacturing Company Records, Register: Jan.20, 1835-Dec. 4, 1836, Baker Library, Harvard Business School.
 - 35) Dublin, *Women at Work*, 103-104.
 - 36) 男性の熟練職人の共和主義については、Sean Wilentz, *Chants Democratic: New York City and the Rise of the American Working Class, 1788-1850* (New York: Oxford University Press, 1984), Chap. 2; ウィレンツ、安武秀岳監訳、鶴岡裕典・森脇由美子共訳『民衆支配の讃歌——ニューヨーク市とアメリカ労働者階級の形成、1788～1850 上』(木鐸社、2001年)、第二章を参照。
 - 37) Beth A. Salerno, *Sister Societies: Women's Antislavery Organizations in*

- Antebellum America* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 2005), 29, 44, 194;
The Liberator, Dec. 6, 1834; Thomas Dublin, ed., *Farm to Factory: Women's Letters, 1830–1860* (2nd ed., New York: Columbia University Press, 1993), 107.
- 38) Harriet Farley to Maria Weston Chapman, Mar. 10, 1843, Anti-Slavery Collection, Boston Public Library, Boston, Mass.
- 39) Dublin, *Women at Work*, 108–109.
- 40) *Ibid.*, 108–113.
- 41) Dublin, *Women at Work*, 108–15; Miles, *Lowell, As It Was*, 101; *Voice of Industry*, June 19, 1845; John R. Commons, et al., eds., *A Documentary History of American Industrial Society. Vol. 8: Labor Movement* (New York: Russell & Russell, 1958), 81–85.
- 42) Commons, *A Documentary History, Vol. 8*, 133–34; John R. Commons, et al., *History of Labour in the United States, Vol. I* ([1918]; New York: Augustus M. Kelly, 1966), 537–39; Dublin, *Women at Work*, 108–113.
- 43) Commons, *A Documentary History, Vol. 8*, 133–38; Commons, *History of Labour, Vol. I*, 540–41; *The Dictionary of American Biography, Vol. VIII* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964), 460–61.
- 44) Commons, *History of Labour, Vol. I*, 541; Commons, *A Documentary History, Vol. 8*, 83–84, 188–99.
- 45) Dublin, *Women at Work*, 118–19; Commons, *History of Labour, Vol. I*, 540; Commons, *A Documentary History, Vol. 8*, 133–51; Philip S. Foner, ed., *The Factory Girls* (Urbana: University of Illinois Press, 1977), 230–31, 246.
- 46) *Voice of Industry*, Nov. 14, 1845.
- 47) Foner, *The Factory Girls*, 231.
- 48) B. M. Sterns, “Factory Magazine in New England,” *Journal of Economic and Business History* (Aug. 1930), 688.
- 49) Edward T. James, et al., eds., *Notable American Women, 1607–1950, Vol. 1* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1971), 596–97; Foner, *The Factory Girls*, 27–29.
- 50) “Factory Girls,” *Lowell Offering*, Series 1: No. 2 (Dec. 25, 1840), 17–19.
- 51) Dublin, *Women at Work*, 122–25; Paul Faler and Alan Dawley, “Working-Class Culture and Politics in the Industrial Revolution: Sources of Loyalty and Rebellion,” *Journal of Social History* (1975); Paul Faler, “Cultural Aspects of the Industrial Revolution: Lynn, Massachusetts, Shoemakers and Industrial Morality, 1826–1860,” *Labor History* 15 (Summer 1974).
- 52) Friedrich Langer, “Class, Culture, and Class Consciousness in Antebellum Lynn: A Critique of Alan Dawley and Paul Faler,” *Social History* 6 (1981); Sean Wilentz,

- “On Class and Politics in Jacksonian America,” *Reviews in American History* (December 1982); Sean Wilentz, “The Rise of the American Working Class, 1776–1877: A Survey,” in J. Carroll Moody and Alice Kessler-Harris, eds., *Perspectives on American Labor History* (Dekalb: Northern Illinois University Press, 1989), 97.
- 53) Foner, *The Factory Girls*, 60.
- 54) *Ibid.*, 63–68.
- 55) Harriet Farley to Maria Weston Chapman, Mar. 10, 1843, Anti-Slavery Collection, Boston Public Library.
- 56) “The Lowell Convention,” *The Liberator*, Mar. 24, 1843.
- 57) 例として、*Voice of Industry*, Aug. 21, 1845; *Voice of Industry*, Dec. 5, 1845; *Voice of Industry*, Aug. 27, 1847.
- 58) Commons, *History of Labor, Vol. I*, 539–40; Dublin, *Women at Work*, 121–22.
- 59) Dublin, *Women at Work*, 132–64; 「教職の女性化」とローウェルの女工の関係については、拙稿 “Between Factory and School: Women School Teachers in Early Nineteenth-Century New England,” *Japanese Journal of American Studies* 17 (2006), 113–28.

(本稿は、平成18–20年度 科学研究費補助金・基盤研究B（一般）「ニューエコノミー型経済システムの研究」（代表 秋元英一 帝京平成大学教授）の研究成果の一部である。)

“I Cannot Be a Slave”

—Mill Girls’ Protests during the Market Revolution—

Yukako HISADA

In the early nineteenth century, many thousands of young women left their homes in rural New England to work in the textile factories such as those in Lowell, Massachusetts. The proprietors were proud of their “respectable” workers, who were well-educated and had republican virtues. These factory workers were mostly farmers’ daughters, lived in the company boardinghouses, and started editing their magazine, *the Lowell Offering*.

While this model system of Waltham-Lowell mills impressed Charles Dickens and other foreign visitors, the factory workers protested against their degrading working conditions in the 1830s and 1840s. The first strikes or “turn-outs” occurred in Lowell in the 1830s, and in 1840s the factory workers petitioned to the Massachusetts legislature for a ten-hour working day.

The mill workers had a strong notion of being “daughters of freemen,” whose ancestors fought for freedom during the American Revolution. They sang “I Cannot Be a Slave” during the protesters’ procession. While the working people started using the words “white slavery” and “wage slavery” to express their degrading conditions in this period, the abolitionist movement arose. David Roediger pointed out the existence of white working-class racism in the dichotomy between slavery and freedom while some working people, both men and women, believed in the abolition of any kinds of slavery. Then how about Lowell mill workers?

In 1845 when the Massachusetts House of Representatives rejected the ten-hour petition, a group of militant women workers, who did not have the right to vote themselves, campaigned through the labor press *the Voice of Industry* to ask their male co-workers not to vote for William Schouler in the coming election. Schouler had served the chair of the special committee to investigate the working conditions in Lowell factories. Another group of women workers, on the other hand, took over the editorship of the factory girls’ magazine *the Lowell Offering*, of which proprietor was Schouler, and they seemed to cooperate with a group of abolitionists. While it is said that the notion of “separate spheres” emerged in this period, we should reconsider women mill workers within a political context.